

なぜ永遠に色あせないのか？ 魅力の真髄を大研究 大人を魅了する、「トレンチコート」の美学

流行はもろろん、性別や年齢すら超越する永遠のベージュシックアイテム：トレンチコート。その特別な存在感を、服飾史家の中野香織さんに分析していただきました。

「トレンチコートは、もともと第一次世界大戦中、英国軍が塹壕（トレンチ）戦で着るために考案された軍用服。細部まで機能を追求したデザインは、究極にマスキュリンなはずなのに、それがまず、日常に着る洋服として男性に響いたポイントだと思います」

クラシックなトレンチコートについて復習してみましょう。雨や風の侵入を防ぐ襟やそで口の仕様、腕を動かしやすいラグランスリーブ、戦場で必要な装備品を固定するためのエポーレットやDリング（ベルト部分の金具）、発砲の衝撃から体を守るガンフラップ、ボタンを外すと広がる後ろすそのインパーテッドプリーツ（ひだ山を内側で突き合わせた仕様）…。軍のなかでもステイタスのある将校が着用するアイテムだけに、機能的であると同時に格調高さも香り立ちます。そして、その魅力をファッションとして広く知らしめたのが、往年のハリウッドスターたちが、1940～50年代にスタイリッシュな存在感で魅せたハンフリー・ボガートの着こなしが代表格

です。一方、女優で最初にトレンチ・アイコンとなったのは、グレタ・ガルボでしょう」と中野さん。硬派なデザインがかえって繊細な女性らしさを際立たせていることに加え、色の効果についても指摘。「実は、トレンチのベージュは uncommunicative（コミュニケーション力が低い）、つまり匿名性の高い色。身を守るために完成された、いわば防衛ともいえるべきデザインと、この女性はどうなんなのだろう」と思わせるベージュという色の相乗効果とで、着る人の神秘的な魅力が際立って見えるのです」

また、トレンチをブレイクさせたトレンチ・スターとしてオードリー・ヘプバーンを見てみると…。「完成度の高いデザインゆえ、内面が充実していないと着る人が記号化されてしまうのが、トレンチの手ごわさです。一方で、オードリーのようにキュートにもシックにも年齢やシーンに合わせてさまざまな着こなしができるのも、トレンチならではの。自分の個性を知るほどに、トレンチの着こなしの可能性は限りなく広がるのです」

自分らしいおしゃれを表現する経験値を高めた今だからこそ、私たちは、改めてトレンチに惹かれるのでしょうか。

中野香織

Profile

なかのかおり エッセイスト、服飾史家、明治大学国際日本学部特任教授。ファッション文化史、ダンス・ディズム史、イギリス文化史を専門に、過去2000年の男女ファッション史から最新モード事情まで研究・執筆・レクチャーと幅広く活躍。最新著書は『紳士の名品50』（小学館刊）



©Collection Christophel/AFL0 ©MPTV/amanaimages

機能的な衣料からファッションへと広がる起爆剤は優秀素材から

トレンチを語るうえで外せないのが素材力。パーバリーが1879年に開発した撥水・通気性に富んだ「ギャバジン」は、南極探検家の防寒着に使われ、優秀さを証明。第一次大戦時にトレンチの前身となる軍用服に起用された。戦後は着心地がよくファッションブルなレインウェアとして進化。左は1959年の広告。



写真提供 / パーバリー ジャパン



トレンチをいち早くファッションブルに着こなしの2大スター

右上/1940～50年代、ハンフリー・ボガートが映画「カサブランカ」で着用して以来、ハードボイルドな雰囲気を出すアイテムとして定着。左上/サイレント映画期・トーキー映画初期を代表する伝説的女優グレタ・ガルボ。全身を包み隠す着こなしが、神秘的な美貌を際立たせて。